

近藤邦明、稲田敦

前略 論文の採用は無理との手紙をいただきましたが、その理由はまったく不当です。

委員長からの手紙によると、査読者A、Bの見解を根拠にして、

「原稿では、数年スケールの変動において、気温変動がCO₂の変動よりも先行する(位相が進んでいる)ことが指摘され、これを根拠にして、長期的なトレンドにおいても気温上昇がCO₂増加の原因であるとの主張がなされておりますが、両査読者が指摘するように、数年スケール変動における因果関係と、長期トレンドにおける因果関係が同じであるとする根拠はなく、原稿中ではその点について説得力ある論拠が示されておられません。この件は、貴論文の本質的な問題として第1稿の段階から両査読者によって指摘されてきたことであり、2回の改稿によっても解決にいたりませんでした」

とあります。

しかし、この委員長の見解は、まったくの誤解というより、むしろ「いいがかり、こじつけ」に類するものです。

長期的トレンドを除いて、気温とCO₂濃度との関係を論じたのは、キーリングでした。これでは、委員長のいうように長期的トレンドを論ずるには無理があります。しかし、われわれの手法はこれまでに得られた34年間のデータすべてを用いて、解析したものであり、長期的トレンドそのものを論じています。

特に、今回の論文では、気温とCO₂濃度変化率の直接の関係について新事実を発見し、34年間にわたって気温高が原因で、CO₂濃度上昇という結果となる因果関係を発見したのです。

委員長が断定するような「気温がCO₂濃度に先行する」ことを論拠にはしていません。むしろ、温度と濃度の関係、および温度の変化率と濃度の変化率の関係について、いずれも温度がCO₂濃度よりも1年先行することになることを、上記因果関係より証明したのです。

『天気』誌が、学会の科学誌ならば、「いいがかり、こじつけ」で投稿論文を処理することを止め、科学誌として新事実の発表を認めるべきです。編集委員会において再審査するよう求めます。

なお、査読者AおよびBの見解は、論文発表後の論争とすべきもので、A、Bの好みに合わないという理由で論文採用を拒否するとすれば、一般科学誌ならばともかく、学会誌ではしてはならないことと考えます。

第1回の投稿は08年4月でしたから、新事実は、ほぼ1年間、店晒しになりました。

以上